時流を読む

耕作放棄地は地域資源だ

農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷 栄一

耕作放棄地で大規模経営

この5月に、農水省が「みどりの食料システム戦略」を決定した。その目標の1つである有機農業比率25%（100万ヘクタール）が、2050年での数値とはいえ、現状0・5%とはあまりにも乖離が大きいことから、けっこう話題となっている。

9月に行われたあるフォーラムで、ズバリ「2050年有機農業を25%にする～は可能か」がテーマのシンポジウムが行われた。その中での、長崎県五島市にある農業生産法人・（株）アグリ・コーポレーションの佐藤代表からの報告だ。2011年に祖父の出身地である五島列島に移り、翌12年に会社を立ち上げ、安納芋やその他の「真面目な野菜」の生産とともに加工・販売を始め、18年には有機認証を取得し、現在では35ヘクタールで耕作しているという。農地は耕作放棄地を活用したもので、既存の農家と棲み分けしながら共に地域農業の振興を図っているとの話が大変に印象的であった。

これを受けて、コーディネーター役の石川県にある（株）金沢大地の井村代表取締役からは、現在経営している農地面積180ヘクタールのほとんどは能登半島の耕作放棄地を活用しての有機農業である旨の紹介があった。

これまで有機農業の拡大といえば既存の慣行栽培からの転換を主にイメージしていたが、2人の発言から、耕作放棄地の活用も大きな可能性を秘めていることを感じさせられた。

多様な耕作放棄地の活用

ちょうどその頃一緒になった静岡県磐田市に住む親戚の話だ。近くの畑を借りて家庭菜園を楽しんでいたが、畑の返却を求められた。そこで、車で15分ほどかかるものの、知人が手を入れられずに耕作放棄地となっているところを借りて自然農法に取り組み始めたそうだ。いくら使ってもいいとのことで、家庭菜園の域を超えて取り組みつつあるらしい。

この話を銀座ミツバチプロジェクトの高安理事長にしたところ、耕作放棄地での養蜂もけっこう増えているという。耕作放棄地には様々の雑草が混在するが、そうした中には花をつけて、貴重な蜜源にもなるものもあるとのこと。

雑草で土を変える！

そんな折に『やさい畑』（家の光協会）なる雑誌の「雑草で土を変える！」なる特集を読んだ。「生ごみ先生」で知られる吉田俊道氏が執筆したもので、刈り取った雑草を敷き詰めて黒マルチをかけ、2、3か月おいて糸状菌等の好気性菌を増やすことによる土づくりをすすめている。まさに耕作放棄地の有効活用とも重なる農法だ。

一連の話から、耕作放棄地といえば〝困りもの〟としか見えなかったものが、〝雑草は宝〟であり、耕作放棄地は貴重な〝地域資源〟であるように思われてきたから不思議だ。発想と担い手の組合せ次第では、耕作放棄地だからこその活用が期待できそうな時代になってきたようにも感じる。